
紅の蓮を救い出せ

桃野アリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅の蓮を救い出せ

【Nコード】

N8960Y

【作者名】

桃野アリス

【あらすじ】

少年陰陽師現代パレル物です。

まだまだ稚拙な文章ですが、応援していただけたら幸いです。
???

安倍清明が息を引き取った数十年後、安倍昌浩が黄泉へと旅立った。そして時は流れ、平成。

安倍家は裏で陰陽師家業を営んでいた。十二神将は平安時代から変わらず、昌浩の遺言で安倍家に仕え続けていた。だが、十二神将最強にして最凶の煉獄の将、勝蛇は心を開かなかった。

そんな時、安倍家に双子が生まれる。双子は、勝蛇を恐れず笑いかけたのだった。

双子は育ち、中学生になる。ある日、兄が勝蛇に言った。

「俺、安倍清明の記憶持つてるぞ。言い忘れてたが」

平安時代と変わらない狸の兄・春輝と、

「ああ、あの安倍春輝の弟か」「弟言うな!」

勉強より運動が得意で、優等生の春輝に劣等感を持つ昌輝。

さらに、昌輝には何やら秘密があるようで　　？

夢（前書き）

始めまして、桃野アリスと申します。

2次創作作品を投稿するのは初めてなのですが、温かく見守って頂けたら幸いです。

夢

十二神将の主であつた安倍清明がこの世を去り、時を経て同じくこの世から去つた安倍昌浩。

黄泉の路へと旅立つ時、共に2人は己を見る家族と人外の者達に微笑んでいたという。

そして、残された十二神将は、昌浩の子孫に代々仕える事になる。

それは、生前の昌浩の意志であつた。

清明と昌浩の他にも、多くの人が十二神将の主となつたが、十二神将勝蛇は心を開かなかつた。

いや、この表現では語弊があるかもしれない。

勝蛇が近寄るだけで、子供どころか大人でさえも恐怖に身を竦ませた。

昌浩と彰子の息子の明昌は怯えず、霊力が強かつた為十二神将の主となつたのだが、明昌に子供が出来ることはなかつた。

勝蛇が最後に心を開いたのは、明昌だつただろう。

そして、数え切れないほどの時が流れ、今は平成である。

???

何も見えない闇の中。

男は一人、そこに佇んでいた。

深い紅色の髪、黄金の瞳。長身で、逞しい体躯。

人間とは比べ物にならない程綺麗な顔立ち。

だが、その顔が笑う事は無い。

何をするでもなく、ただそこに居続ける。

不意に、男は目を見開いた。声が聞こえた気がしたのだ。

紅蓮！

それは、懐かしい、誰よりも大事な人の声。

もっくんやーい

だけど、もう居ない人の声。

分かっている。この声が、もう俺の名前を呼ぶことはない。

だって、俺は旅立った瞬間を見ていたのだから。

これは幻聴なのだ。

そう思い耳を塞いでも、呼ぶ声は止まらない。

覚えている。

そか、俺、生きてるんだ

呆けたような声を。

覚えている。

お前、俺の目にならない？

もっくん、俺の目になってよ……

嬉しそうな声と、泣きそうな声を。

……覚えている。

何言ってるんだい。：ああ、また痛そうな顔してる。馬鹿だなあ。痛いときは、痛いって言っていていいんだよ？

俺を救ってくれた声を。

ばかだな。俺がいるって言ったの、独りじゃないって言ったの、お前じゃないか

例えもう居なくなってしまうたとしても、それでも俺は。

見た者に元気を与える笑顔を。

孫言っな、と憤慨していた声を。

一度わすれてしまった記憶だけど。

もう絶対に、忘れない。

夢（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願い致します。

締め

「勝蛇」

目を開けると、肩に付かない位置で切りそろえた漆黒の髪に黒曜の瞳を持つ女性が覗き込んでいた。

彼女が身体を反らすのと同時に、男は身を起こした。

男は十二神将、勝蛇。驚恐を司る十二神将最強にして最凶の闘将だ。

勝蛇は眉を顰め、女性に声を掛けた。

「……何の用だ、勾」

「用がないと来てはいけないのか？それに、寝ていたのだから良いだろう。寝ている、という事は暇だという事だからな」

「……」

十二神将が一人、勾陳。凶将で、騰蛇の次に通力が高い。

普段は理性で力を抑え込んでいるが、怒るととても怖い。冗談抜きで。

「良い知らせだ。子供が生まれたらしい」

薄く微笑して勾陳が言うと、勝蛇は眉を顰めた。

「……そのどこが良い知らせだ。怯えるに決まってるだろう」

「だが、昌浩は怯えなかったな」

間髪せずに戻って来た答えに、黄金の瞳が微かに揺れた。

「それはそうだが……」

「正直、今のお前を見ているのは苛々する。分かったら早く行け」

「おい、俺は行くなんて一言も……」

「早く行け」

「だから……」

「行け」

尚も言おうとすると、いつもの苦笑とは違う笑顔を向けられた。

勝蛇は内心で溜息を吐く。堂々と吐かないのは、彼女が恐ろしいからではきつとない。

「……どうせ怯えるぞ」

一言呟き、勝蛇は姿を消した。

「今度は大丈夫だと思うがな……」

その言葉を聞く者はなかった。

???

勝蛇は現世に降り立った。

平安時代と場所は同じだが、何度も建て返され、土地が異様に広い普通の家となっている。

「……勝蛇、居るのですか？」

『……ああ』

呼ばれた勝蛇は隠形を解き、顕現した。

安倍吉昌。何の因果か、清明の息子 昌浩の父である吉昌と同姓同名だという事位しか記憶に残っていない。

勝蛇が呼ばれる事は全くと言っていい程なかったからだ。

「子供が産まれました。勾陳も先程会いに行っていたようです」

「……そうか」

勾陳も会いに行ったのか、泣かれなかったのだろうか。

そんな事を考えていると、吉昌が言った。

「そうそう、双子なんですよ」

「……双子？」

「ええ、忘れてたのですがね」

そんな重要な事を忘れるなど言いたい。

地味に清明の血が受け継がれているのだろうか。そういえば、明昌が亡くなった後安倍家を引き継いだのは、最も清明の性格が出ていた成親だったような。

「隣の部屋に居ますよ。六合が見ています」

「……分かった」

さっさと会って、異界に戻ろう。

赤子は、苛烈な神気に怯えて、泣くに決まっているのだから。

締め（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願いいたします。

再会（前書き）

少し短いです。

再会

部屋に入ると、標準よりかなり大きい揺り籠に寄り添っていた男が振り向いた。

十二神将が一人、六合。腰の辺りで一つに括った鳶色の長い髪と、黄褐色の瞳。木将であり、勝蛇や勾陳と同じ四闘将の一人でもある。

傍に近づくと、中で赤子が2人仲良く寝ているのがわかった。

「俺が近くに居るのに、寝てるな……」

「……ああ」

こんな事は、昌浩と明昌以来だ。……他は、全員拒絶したから。

恐る恐る手を伸ばすと、右側の赤子の目が開いた。

「あ……」

きつとまた、怖がらせてしまう。

赤子は本能に忠実で、勝蛇の苛烈な神気を恐れる。

そう思い手を戻そうとするが、出来なかった。

赤子が、小さな手で勝蛇の手を掴んだから。

そして、赤子は笑った。だが、

「……おい、六合。赤子ってこんな笑い方をするのか？」

「……」

その笑顔は、無邪気ではなく、悪戯っ子の様な含みを感じさせる
笑みだった。

「そういえば、名前は何と言った？」

「……右が春輝、左が昌輝だ」

「春輝、ねえ。そういえば、昌輝はずっと寝てるな」

勝蛇の言葉を理解したかのように春輝が声を出し始めた。

「あ、あい。おえあおうお」

何を言っているのかと2人が疑問を顔に浮かべた所で、

「あー？えー」

春輝の声に答えた様に、やっと昌輝が目を覚ました。

昌輝は周りを見回すと、紅蓮を見て無垢な笑顔を見せた。

今度は赤子らしくてよかった、と聊か間違った方向に2人が安堵
している横で、双子が話し(?)ていた。

「おいうおおおい」

「おうおえ」

赤子の言葉は分からない。

???

「どうだ？怖がらなかっただろう」

吉昌の妻、露菜に双子に母乳を与えろと言われ、六合とともに部屋から追い出されると、勾陳が廊下の壁に寄り掛かっていた。

「ああ……、だが昌輝は兎も角、春輝は赤子らしくないぞ」

「……俺もそう思う」

普段無口な六合が珍しく同意したのに軽く瞠目して、勾陳は微笑した。

「そうだな。でも、懐かしくなかったか？」

その言葉に勝蛇と六合は顔を見合わせる。

言われてみれば、確かに、春輝は懐かしく感じた。

そう あれは。

「清明の笑顔、だな」

再会（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願い致します。

ある日の日常1（前書き）

今度は長いかもしれません……。

ある日の日常1

春輝と昌輝に出会ったその日から、勝蛇は顕現することが多くな
った。

今も、春輝を勝蛇が抱き上げようとしているが、それはとても慎
重だ。

勝蛇は恐れている。自分の手で、双子が傷ついてしまう事を。

泣いたり怯えて、自分から離れてしまう事を。

これは、ある意味臆病な勝蛇を見守る、十二神将の一日。

???

未だに抱き上げるだけで緊張している勝蛇を見て痺れを切らした
勾陳が、提案した。

「勝蛇、そんなに気にするなら、爪を切ったらどうだ。そのままだ
と引っ？く危険がある」

「おお、それはいいな」

言ったのは良いものの、余りにも余りな爪切りの使い方に、彼女
は眉を顰める。

「……待て、不器用すぎるだろう」

「やった事など無いからな」

言い切り、続けようとしたのを勾陳が止めた。

「貸せ、私が切ってやる。……おい、歯で噛み切ろうとするな」

「駄目か？」

「駄目だ。大体、今まで切らなかったのか」

「思いつきもしなかったな」

「まったく……」

勝蛇の言葉に、彼女は深い溜息を吐いた。

???

その様子を見ていた少女が居た。

十二神将が1人、太陰。六歳ほどの幼い外見をしている。桔梗色の瞳で、栗色の長い髪をツインテールに結っていた。

太陰は、顔を引き攣らせながら隣の少年に尋ねた。

「ちょっと、甘い空間が出来ている気がするんだけど。気のせい？」

彼女は圧倒的な通力を持つ勝蛇を恐れていたが、今ではかなりマシになっていた。

「いや、我もそう思う」

冷静に答えたのは十二神将が1人、玄武。見た目は太陰同様、子供の姿をしている。

尤も、本当は幾百年、幾千年の時を過ごしているのだが。

『私も、間違っていないと思いますよ』

そう言っ て顕現したのは天一。十二神将の一人で、優雅に結い上げた陽の光のような金の髪と、晴れ渡る冬空や淡く凍てついた湖にも似た色の瞳の美少女だ。

『まったく、勝蛇はあの双子が生まれた途端明るくなったな』

呆れた様に呟いたのは朱雀。同じく十二神将であり、勝蛇と同じく火将だ。濃い朱色の髪とくすんだ金の瞳を持ち、天一の恋人でもある。

「仕方ないですよ。何せ、清明様と昌浩様に似ておられるのですから」

「そうだな、勝蛇にとって一番大事なのはあの2人だったからな。まあ、俺が一番大切なのは天貴だが」

「朱雀……」

途端に甘い空気を作りだした2人を見て、太陰は嘆息を溢した。

「まったく、この2人も飽きないわね」

「幸せそうだから良いではないか」

まあね、と玄武に返して、太陰は新たな者が現れた事で騒然となつてゐる所へ視線を戻した。

ある日の日常1（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願い致します。

ある日の日常2

其の俣勾陳に爪を切られ続けていた勝蛇だが、嫌な神気を感じて振り向いた。

すると、そこにはいつの間にか春輝を抱き上げていた六合と、今来たのだろう男が昌輝を抱き上げようとしている。

「おまつ、何してる！」

勝蛇の怒りの矛先は、六合ではなくもう一人に向いている。

「貴様に教える道理はない」

そう言い放って、男は昌輝を抱き上げた。

十二神将が一人、青龍。不揃いな長くて青い髪と夜の湖のような深い蒼の瞳を持っている。彼は普段絶対に見せない満面の笑みを昌輝に向けた。

「お前、昌輝に触るな！気持ち悪い」

「爪など切られている貴様の方が気持ち悪い」

青龍は昌輝に手を伸ばしてきた勝蛇の手を避けて、

「昌輝を渡すつもりはない。俺を倒してからにしろ」

「良いだろう、この勝蛇を甘く見るなよ……！」

煉獄の将勝蛇の神気が強まり、同じく青龍の神気も高まったところで、2人の首筋に手刀が走った。

「「がつ」「

「いい加減にしろ。昌輝を巻き込むつもりか？」

珍しく顔に怒りを滲ませた勾陳が2人に諭すと、何か言おう物なら恐ろしい事になる気配を感じ取り、同時に押し黙った。

「それと、今は爪切りをしていたのに邪魔するな」

「「そつちか!?!」「

しない方がいいと分かっているも、2人は突っ込んでしまった。

「何だ、何か文句があるのか？」

「「……ないです」「

思わず敬語で答えた2人に、勾陳は微笑した。

「先程から声が重なっているな。お前達、実は仲がいいんじゃないのか？」

「「なっ……」「

再度声が重なった2人は、お互いを睨み始める。

「俺の真似をするとはいい度胸だな！」

「貴様こそ、辞める事だな！」

「まあとりあえず、昌輝は私が預かっておこう」

勾陳の思いがけない一言に、2人が固まる。

「おつ、おい、それはないだろう！」

「勝蛇を近づけないなら解るが、俺は関係ないぞ」

「何だと？」

彼女は深い溜息を吐いて、断言した。

「喧嘩ばかりしているお前達は、昌輝の教育に悪い」

「「なら、こいつを近付けなければいいだろう！」」

「??？」

「あの2人は仲がいいですね」

「そうじゃなあ」

太陰達とはまた違う所で見守っている男性2人が居た。

十二神将が1人、太裳。青磁の髪に紫苑の双眸を持つ。

もう一人は同じく十二神将の天空。灰白色の長い髪を持ち、口元とあごに蓄えたひげは胸に届くほどある。

「でも、何時になったらまともに話せるようになるんでしょうか」

「春輝と昌輝が何とかするじゃろつて」

「そうだといいんですけどね」

太裳が目を向けた部屋の中では、ある1人の女性に依って収拾がついていた。

ある日の日常2（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなど感想にてご報告下さい。

ある日の日常₃（前書き）

読んで頂き有難う御座います。

ある日の日常3

「「なら、こいつを近付けなければいいだろう!」」

「はぁ……」

勾陳がその言葉に深い溜息を吐くと、隣に見知った神将が顕現した。

「どうしましたか?」

「いや、こいつらがな……」

勾陳が経緯を説明すると、女性は目を細めて、言った。

「2人共、……泣きますよ?」

「「ッ!?!」」

睨みあっていた2人を硬直させたのは天后。

長い銀髪に翠色の瞳の十二神将だ。

「貴方達が口喧嘩をしてる事で、春輝様と昌輝様が喧嘩好きになっただけなの?」

押し黙る2人に、勾陳が非情な言葉を投げかけた。

「春輝と昌輝が歩くか言葉を話せる様になるまで、会えなくするの

はどうだ？」

「なっ」

「待て、勾！赤子が最初に一步を踏み出すのは俺が知ってる限り8ヶ月頃が一番早い。だが、遅いと一歳4ヶ月にもなるんだぞ！それに単語を繋げて喋るのは大体一歳後半。会話が成り立つのは2歳頃だ。8ヶ月でさえも耐えられないのに、もしかしたら2年会えなくなるなんて無茶にも程があるだろう！」

一息に言いきった勝蛇の勢いに、4人が少し後ずさる。

「……勝蛇、お前詳しいな」

逸早く立ち直った勾陳の言葉に、勝蛇は大きく頷いた。

「そりゃ昌浩と明昌から目を離さなかったからな。昌浩は歩くのも話すのも早かったが、明昌は遅くてハラハラしたぞ」

「……そんな細かい所まで覚えてるのね」

「……少し貴様を見直してやってもいい」

「……」

六合を含めて空気が微妙な物になった所で、遠くから事の成り行きを見守っていた太陰が近づく。玄武も慌てたように追いかけた。

「ちょっと、何固まってるのよ。春輝と昌輝と遊んでいい？」

「ああ」

勾陳が返事をする、太陰の爆弾発言が飛び出した。

「よし、じゃあ2人を風に乗せてあげるわ」

「ちょっと待つて」

天后が聊か慌てて声を上げ、

「さすがに危険すぎるぞ」

勾陳が呆れたように呟き、

「貴様の風は荒過ぎる」

青龍が吐き捨て、

「白虎ならまだしもな」

眉を顰めて勝蛇が窘め、

「……止めておけ」

六合でさえも口を出した。

そこに居た5人が同時に否定した事に、太陰は頬を含まらせた。

「何よ、いいじゃない！大丈夫よ、気をつけるもの」

「……太陰」

「あつ、玄武、どこに言つてたのよ。手伝つて」

振り向いた太陰が固まる。視線の先に居たのは玄武だけでは無かった。

十二神将が1人、白虎。肩につかない亜麻色の総髪と灰色の瞳で、かなり身体が大きい。太陰と同じ風将だ。

「何をしている。悪いが、俺はこれから少し用があるから行くぞ。太陰、来い」

「えっ、待ちなさいよ!」

白虎は抵抗する太陰に構わず、笑って提案した。

「最高記録を更新してみるか?」

「嫌っ!」

太陰が異界に連れて行かれた事で、一同は息を大きく吐き出した。

そこで勝蛇がある事を思い出して勾陳に尋ねた。

「おい、勾、さっきの如何だったんだ!? …… 2人に会えなくなるのか?」

殆ど見る事が無い悲痛な表情で詰め寄った勝蛇を見て、

「ああ……もういい、好きにしろ」

さすがに面倒臭くなって諦めた。

「という事は、俺も良いという事だな」

青龍の言葉に、即座に勝蛇が目を向けた。

「お前には良いって言ってないだろう」

「言ったような物だ」

「2人共、止めないと泣きますよ？」

天后の言葉にまたも2人が硬直する。

「まったく……本当に、いつも通りだな」

勝蛇と青龍が春輝と昌輝（特に昌輝）を取り合い、

勾陳が諫め、天后が脅し、六合が呆れ、

太陰が暴走し、玄武が慌て、白虎が怒り、

天一と朱雀が桃色の空気を作り出し、

太裳と天空が全てを見守る。

でも、こういう日々も悪くない。

ある日の日常3（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願いします。

言葉（前書き）

お気に入り登録と評価、有難う御座います。

調子に乗ってもう一話投稿です。

言葉

日射しが強い、真夏の一日。

少し前に春輝と昌輝が非常に頼りないが歩けるようになった事で、みんな喜んでいたのだが、勝蛇と青龍が一際喜んで居たのはまだ記憶に新しい。

勾陳が自室で読書をしていると、物凄い勢いで扉が開き、勝蛇が入って来た。

「勾！聞いてくれ、2人がもう少しで俺の名前を呼べるぞ！」

「そうか」

生粋の双子ばかだな、と思った事は言わないでおく。

導かれるまま居間に行くと、勝蛇と勾陳以外の十二神将と吉昌と露菜が揃って揺り籠を覗き込んでいた。

「お前ら、さつきは誰も居なかったのに何で居るんだ」

不機嫌そうに呟いた勝蛇に、青龍が双子から目を離さず答えた。

「貴様が居なくなるのを待っていたに決まっている。それより、まだ俺の名前が呼べていないから居なくていい」

「何だと、お前こそ何処か行けばいいだろう」

「2人共、止めないと泣きますよ？」

いつものやり取りが行われる横で、勾陳が呆れて進言した。

「大きいとはいえ、揺り籠を覗き込むのは息苦しいだろう。籠から出してやったらどうだ？」

「そうですね、そうしましょう」

勾陳の言葉に頷いた吉昌が、双子を床に下ろした。

「あー、おー」

「えー、うー」

床に手を着いてから改めて立ち上がった2人を14人が取り囲む。

何人かが口々に自分の名前を繰り返して言わせようとするのを見かねて、天后が言った。

「皆さん、静かにしないと泣きますよ？」

その言葉に名前を繰り返していた神将はビクツと身体を震わせて、一様に黙った。

その様子に天一が微笑んで、

「皆さん、2人が最初に名前を呼ぶべきなのは吉昌様と露菜様ではないでしょうか？」

「天貴の言う通りだ。両親なんだからな」

正論に、渋々ながらも神将達は道を譲る。

「ありがとうございます」

吉昌が礼を言っ、露菜がそれに続いた。

「春輝。お父さん、です。言ってみてください」

「お父さん。お父さん、ですよ」

2人が春輝に向かってそう繰り返すと、舌つ足らずだが

「おとーしゃ？」

名前を呼んでもらった吉昌は破顔して、春輝の頭を撫でた。

「そうです、よく言えました」

「次は昌輝ですね。私でもいいですか？」

「ええ、もちろん。お母さん、お母さん」

すると、昌輝も露菜の名を呼んだ。

「おかーしゃ」

「はい、はい。すごいですね」

その様子をつずつずして見守っていた紅蓮と青龍が、痺れを切らした。

「次は俺じゃ駄目か？」

「何を言う、俺に決まっているだろう」

「泣きますよ？……春輝様が青龍、昌輝様が勝蛇で良いんじゃないですか」

「そうか！」

勝蛇は天后の言葉に顔を綻ばせた。

言葉（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願い致します。

名前（前書き）

読んで頂き有難う御座います。

名前

全員が昌輝に注目する中、勝蛇は自分の名前を繰り返した。

「勝蛇」ではなく、清明から貰った「紅蓮」という2つ名を。

「紅蓮だぞ、昌輝」

昌浩の見鬼の才が清明によって一度失われ、戻った時。勝蛇は、物の怪の姿で昌浩にこの名を教えた。

「紅蓮」の名は、清明に名付けてもらった、唯一無二の至宝だ。

懐かしい声が脳裏に蘇る。

地獄の業火など、誰が言ったのか。まるで、水面に咲き誇る紅の蓮の様ではないか。

「紅蓮だ、紅蓮……紅の、蓮だ」

「れーん……」

勝蛇は目を見開いた。 人の世では遙か昔。

昌浩も、見鬼の才を失った後まで、「れーん」と呼んでいたのだ。硬直している勝蛇の指を掴み、昌輝は笑った。今までで最高の笑顔で。

???

時が経ち、単語をかなり覚え、会話が成り立つようになってきたある日。

春輝が外に行きたいと言い出した。

「らん、そと、いく」

因みに、青龍は双子に「青龍」ではなく、2つ名の「宵藍」と呼ばせている。

勝蛇と揃って双子ばかりである。

「外だと？危ないから駄目だ」

「やあ、いく」

青龍が突っぱねても、春輝は諦めない。只管に外へ行きたいと言いつける。

すると、それを見ていた昌輝も、隣に居た勝蛇に言った。

「れーん、いく、そと」

「……おいおい」

溜息を吐いた勝蛇に続いて、青龍が言った。

「もし変な奴にでも会ったらどうする」

「れーんがまもってくれる」

「らん、まもって」

「……」

こう言われると、自分を信頼しているのだと分かって無下に断れない。

言葉を探しあぐねていると、隣に2つの神気が顕現した。

「どうかなさったのですか？」

不安そうに天一が尋ねると、朱雀が天貴にこんな顔をさせるな、と無言の怒りを向けてきた。

俺は悪くない、と不満げな表情を浮かべながら勝蛇が経緯を説明する。

「そうですね、確かにちよっと心配です」

「だが、堂々巡りになるぞ。行った方がいいんじゃないか？ 離れないなら大丈夫だろ」

朱雀の一言に、その場の神将が押し黙る。

「……仕方ない」

「貴様……」

青龍が殺気を放つが、勝蛇は受け流して、

「十二神将が全員付いていれば、さすがに問題ないだろう」

青龍の殺気が和らいだ。

「極偶に、少しは役に立つ事を言っな」

『ちよつと待て』

納得しかけた青龍を止めたのは、勾陳だ。騒ぎを聞きつけ異界から降りてきていた。

名前（後書き）

誤字脱字、違和感、その他アドバイスなどご報告お願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8960y/>

紅の蓮を救い出せ

2011年11月30日17時50分発行